

うちなる山々

中野孝次

うちなる山々

中野孝次



うちなる山々
目次

目次

わが月歴画 一月～十二月

うちなる焼ヶ岳……	7
雪中の狩人……	19
チロルの墓碑名……	31
物の見えたる光……	43
中世アルプスへの郷愁……	55
レオナルドの宇宙観……	67
夕焼けの阿蘇……	79
美わしの南チロル……	91
山小屋の秋……	103
幻の乗鞍岳……	115
初冬の山国……	129
塩ノ道紀行……	141

山小屋の雪

薪の火…… 154

鳥・蜂・山椒魚…… 156

山の人びと…… 159

たのしみは…… 161

幻の雪…… 164

冬をおそれる…… 167

漬菜の色…… 170

雪のいろいろ…… 172

凍み雪のころ…… 175

雪解風…… 178

暮雪の嶺…… 181

あとがき

184

わが月歴画 一月
うちなる焼ヶ岳



〈1〉

先だって『ヒラリー自伝』を読んでいたら、この人のけたはずれた体力、あるいは活力を示すいくつものエピソードにまず驚かされた。なにしろそれが並大抵ではないのである。

いろんな挿話がでてくるが、一例を挙げると、ニュージーランド空軍時代にほんの二、三日の休暇でも利用して山にいった話があつて、その強行スケジュールが凄まじい。なにしろ目指す山まで八〇キロないし一〇〇キロを自転車走って、登山して、また自転車で帰ってくるというのだ。大抵のことには驚かない私も、これには呆れかえつた。まさに怪物だ。彼と一度でも同行した者はもう二度と誘いに乗らなかつたというが、それはそうだろう。こんな怪物と一緒にこの身が持たない。

ヒラリー卿はたしかに登山家として恵まれすぎるほど恵まれた資質の持主だつたに違いない。登山能力といい、隊員の掌握力、チームワーク、責任感、どれ一つとってもこれが万人に一人の才能の持主だったことを証明している。だが、彼を山へ、さらに困難な山へ、ついに前人未踏のエベレストという至上の困難へと駆りたてたものの、その一番奥底にある原衝動はなんだったのだろうか。

そこに山がある、だから登るのだ、という言葉は、いまでは有名になりすぎたが、しかしいうまでもなく、ひとは山があるからといってだれもがそこに登りたいという衝動に駆られるわけではない。現に大多数の人間は生涯平地ぐらしをして一向に痛痒を感じないのである。とすれば、山でも海でも極地で

もいいが、そういう人境以外のあらあらしい剥き出しの自然へと人を駆りたてるものは、外部ではなく、むしろその人間自身の内に潜むデーモンの如きものなのではあるまいか。つまりヒラリーは、そういう内から彼をうながす活力ないしデーモンに人並はずれて強く恵まれていて、その欲望を充分に生かしぬいた人物なのであろう。

山がある。そして世の中には、山に登る人間と、登らないでいられる人間とがいる。これは、この山という言葉を海洋あるいは極地と言いかえても同じことだが、どうやら人間には、剥き出しのあらあらしい自然の中で人間生物としての自分を確認せずにいられぬ衝動を持った人種と、都会の複雑な人間関係のなかで泳いでいる方が快適な人種と、二種類あるということなのかもしれない。私にははっきり結論はだせないが、見ているとどうもそういうことらしい。

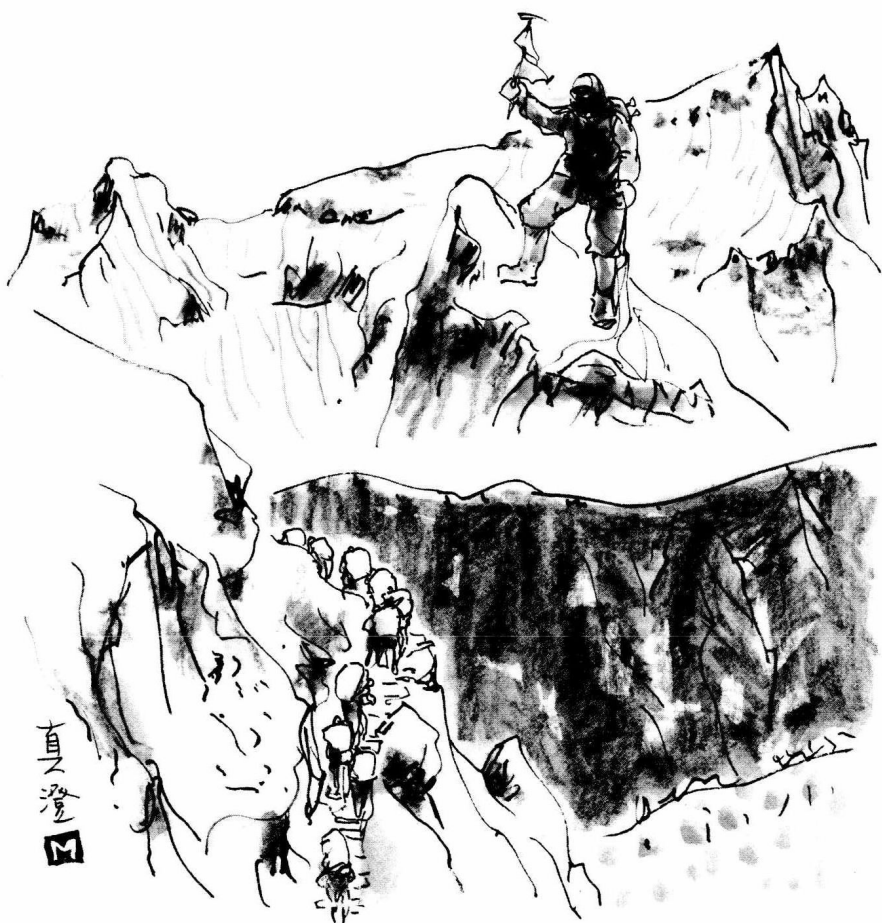
そしてそれは必ずしも、歌にいう、「俺たちや町には住めないからに」、あのわずらしい都会生活への不適合の意識と、そこからの逃避の衝動だけではあるまいと思う。私は、自分自身がときおりこらえようもなくそういう野性のうながしを感じる種類の一人だけに、これだけははっきりとそう言える。それはたしかに、私でも都会の人間関係がわずらわしくなつて、ぼっかり海に仰向けに浮いていたり、山頂から下界を見下ろしたりしているとき、町中にいる者たちに向かってざまあ見やがれ、と思うことはある。しかしそれだけの理由ではあるまい。

私は少年の時分から文学が好きでならなかった人間で、従つて友人の大半は文学青年ばかりだったが、その文学青年の中でも、いま言った二種類の人種ははっきりしていた。丸谷才一は、小説家兼しゃれたエ

ツセイスト、文明批評家として有名だが、彼は決して山なんか登りたがらなかった。丸谷の友人篠田一士は、世界中の文学についての博識では右に出る者のない文学通の批評家で、しかも若い頃は自称全日本級の柔道家だったという巨漢だが、これも山はおろか海へも何へもいこうとしないで、書齋で詩や小説ばかり読んでいることの好きな男だった。またその反対に小男で、文学のよしあしについての鋭い目利きの批評家である川村二郎にいたっては、本さえ読んでおれば人生なぞかまわぬというくらい徹底した出嫌いの間である。

こんな連中ばかりだったから、登山だのスキーだのヨットだのをやる私は、文学青年として自分が少しおかしいのかと疑っていたが、なかにはそうでもない奴もいたのである。やはり仲間に永川玲二というのがいて、これは現代奇人伝を編めば必ず入るというくらいの変り者だが、これが私に輪をかけた野性の信徒で、私はこの男と一緒に山にいつては、たとえば三俣蓮華のテントの中で、こんな解放感を知らず書齋にくすぶっている連中を大いにばかにしたものである。この男は大学紛争時にすっぱり大学をやめてスペインに渡ってしまっただけから、あつちではヒッピーと一緒に各地をうろうろしながら、ピレネーだのアルプスだのに登っているらしかった。

生きる過程で偶然出会った文学仲間でも、こういう二種類の間がいた。両者の違いは、片方が、言葉なり音なりによって創造された世界、それを文化といっているが、この文化を実人生以上に価値ある人間の営みと信じているのにたいし、片方は、その前にまず自分が生身のただの人間生物にすぎない事実をことごとに確かめずにいられない、という点にあったと思う。別の言い方をすれば、前者が、社会的役割とし



ての文学者という立場に立つて、専門的文人として生きていこうというのにたいし、後者はその前にまず自分がただの人間であることをなんどでもそのつど確認せずにいられず、実人生を生きたただの人間の立場から文学を見ようとした点にあった、と言つていいかもしれない。

この区分はおそらく過去の文学者全部についてもあてはまるに違いない。たとえばトーマス・マンとかリルケとか堀辰雄、中村真一郎という文学者は前者に属するだろうし、カミュとかノザックとか、二葉亭四迷、岩野泡鳴などは後者に属する人たちだろう。これは、価値の優劣ではなくて、事実としてそういう違いが認められるということである。こと文学にかかわらず、実社会のさまざまな職業の人びとにおいて、正確にこれと同じ区別が認められるのじやあるまいか。

〈2〉

話がいささか理窟っぽくなった。そこで具体的な実例を示すことにして、要するに問題は、堀江謙一君をヨットによる太平洋横断へ、ヒラリー卿をエベレストへと駆りたてたりするデーモンは何だろうか、ということである。かれらが並はずれた能力の持ち主で、そこには征服という、前人未踏の快挙をしとげようとする野心があったことは間違ひなからうが、それはいまは措く。そうではなくて、ごくふつうの社会生活の営みにあきたらずに、私なら私でいいが、日常から非日常へ、しかもとくに山とか海という自然空間へ駆りたてるものはいったい何だろうということである。

そこで、ヒラリー卿とか堀江氏とか植村直己氏など桁はずれの能力の持主のことでなしに、私はごくふつうの、あるいはふつう以下の体力の持主の場合を挙げよう。私が考えているのは、『虫のいろいろ』の作家尾崎一雄氏の場合である。

尾崎さんに「焼ヶ岳」(昭和十四年)という短い小説がある。これは旧友青柳優が上高地に経営する宿をたずねて、ついでに秋の焼ヶ岳に登ったという、ただそれだけの話だが、人間にとつての山というものの無気味さをしっかりとらえていて、忘れがたい小説になっている。

やっと頂上に登って、案内の友人たちはみな帰ってしまつて、作者ひとり山小屋にとまる。小屋の婆さんに遭難者や心中者の話をきいて、死というものが身近に意識される。そして翌朝早くこんどは彼ひとりで頂上に向かった。そのときの「轟々と云う噴気の音、硫黄の煙」のなかで、彼が一個の無力な人間生物として山というものと相対している感じが、鋭敏にみごとにとらえられているのである。全身で山の存在を感じていると、そのうち、「私は急に可^こ恐^{おそ}くなった」と、作者は記している。

私は急に可^こ恐^{おそ}くなった。

そつと身体を起こしてみた。私の身体は少しふるえている。こわい、確かにこれはこわいんだ、と私は認めた。だが、何故そんなにこわいかはつきりしないのだ。

何分間か凝^じつとしていた。一寸^{ちよと}動くことが出来ないような、動いたら何かしら危ないような気がしたのである。

すうつと気が抜けるように、恐怖心が私から去った。私は「よいしょ」とわざと声を出して立上った。「俺の声は、俺一人にしきや、きこえない」ふとそんなことを思った。「ここは地獄みたいだ」そんなことも思った。すると、私の今までの恐怖の正体が判ったような気がした。

全く取りつく島がない、と云う気持だ。白日の下に、まるで悪夢の中の景色のように晒された岩ばかりの奇怪な眺め、生きて動くものは何一つ無い。虫すらいない。全く突き放された感じなのだ。「凄ね」と云っても岩は黙っている。「すばらしいじゃないか」それにも返事はない。全然無意志の、しかも絶大な力がそこにある。手がつけられない感じだ。そんなことから私は可怖な感じになったらしい。誰か連れがあつたら、こんな経験はしなかったに違いない。人間でなく、犬でも猫でも一匹いたらよかったらう。

言葉で、山というものの不気味な沈黙の感じを、これだけ正確にとらえた文章はめったにあるまい。昔の人はその感じを山霊と呼んで山をおそれた。柳田国男は『山の人生』にそういう昔人のおそれ、畏みなど、山の与えるふしぎ、怪異の数々を記したけれども、近代アルピニズムの発達は人間からそれをすっかり取り払ってしまったのだろうか。尾崎氏の文章が正確に記しているとおり、このぜんぜん取りつく島のない、無意志の、しかも絶大な力の存在は、もしほかに連れでもあつたら感じとれなかった可能性が強いのだ。山があつて、そこに一個の無力なただの人間生物として自己がいる、そのときにだけ感得される性質のものなのである。



尾崎氏はこのとき、冠松次郎の『峰・溪々』という本を上高地に持って行き、全部読んだが、あまり自然と仲好くしているのには妙な気がした、と付け加えている。

〈3〉

さきごろ新聞で、植村直己氏が、極地にいくと都会に帰りたくなり、都会にいとむしようにまた極地にいきたくなると、そんな意味のことを語っているのを読んだ。登山家としても極地冒険家としても、植村氏はこれもヒラリー卿同様超人的な体力の持主のようだが、氏がここでいっている言葉の意味は、やはり尾崎さんが焼ヶ岳にたいして感じたと同じものを、極北の險惡な自然の中で感じたいということだろうと思う。野心とか冒険心とか、自分の能力の限界を見究めたいという願望とともに、その一番奥底にある衝動として、ある種の人間には、なんでもそういう絶大な力の存在を感じて、その中で自分が生きていることをたしかめずにはいられないもの、おそらく原始動物の尻尾の如きものが、あるのである。

もう一つ例を挙げておこう。

藤枝静男氏もまた、たえず自然のそういう圧倒的な力の存在になんども向かいあわずにいられぬ人の一人だが、小説家だから、やはり言葉でそれを明確に記し残している。藤枝さんにはいくつかそういう確認の文章があつて、あとでまた引くことになると思うが、ここでは「山川草木」(昭和四十七年)という短篇の一節を挙げてみる。氏が、岩山とか老樹とか、そういう太古以来変わらぬものに近づかずにおれぬ心情を